

群馬県方言における意志・勧誘・推量表現の考察

—「ベイことば」の諸相と変化を中心に—

篠 木 れい子

はじめに—本論の目的—

言表態度に深く関わる意志・勧誘・推量表現が現在どのように行われているのか、また、それらはどのような歴史的変遷を経て誕生してきたのか。これは、私の興味ある研究課題の一つである。群馬県方言の意志・勧誘・推量表現にもさまざまなすがたが認められるが、本稿ではそれらの表現のいずれにも現れる、いわゆる「ベイことば」を中心に考察する。

古語の助動詞「べし」に由来する「ベイことば」は、その形態には地域差が見られるものの、東京都心部を除く関東地方全域や東北地方一帯、静岡県東部、新潟県東南部、伊豆諸島の一部などの広い範囲にわたって用いられており、古くから有名である。

群馬県においても、「ベイことば」はいまなお健在で、先に述べたように意志・勧誘・推量表現に用いられている。「ベイことば」は群馬県人の日常の言語生活にはなくてはならぬものと言っても過言ではない。しかしながら、「ベイことば」は少しずつではあるが衰退の兆しを見せはじめている。なかんずく、それは若い女性において顕著に認められる。また、年代によって次第にその様相を変えつつあることが注目される。

そこで、いささか資料は古くなるが、本間芳枝氏が1983年に実施した調査資料を使用させていただき、群馬県方言における高年層・青年層の「ベイことば」の諸相および分布を明らかにし、また、その二つの年代層を比較することにより、その変化過程を考察する。

なお、考察にあたっては、井上史雄氏による東日本におけるベイことばの分布および変化の考察を参照^(註1)、東日本における群馬県のベイことばの特色を明らかにする。群馬県下に見られる「ベイことば」はその形式が豊富であり、あたかも東日本の「ベイことば」を一同に集めた「ベイことばの坩堝」といった感がある。したがって、群馬県方言における「ベイことば」の考察は、東日本の「ベイことば」の研究に貢献することができると考える。

1 資料について

資料は、すべて本間芳枝氏の臨地調査によって得られたものである。^(註2)

調査地点は、41地点である（調査地点参照）。

話者はすべて男性。調査時60歳以上のかたがた（明治生まれ7人、大正生まれ32人）と、調査時中学生（高校生1年生〈昭和42年生〉と小学生6年生〈昭和46年生〉各3名を含む）のかたがたである。現時点ではそれぞれ70歳代、20歳代になっておられる。男性は女性に比べてベイことばを保持している傾向が強いことから、10年前の資料ではあるが、話者のかたがたは現在も日常の場にあっ

ては当時の実態を保持していると予想される。したがって、以下に述べる実態は、現在の高年層と青年層の様相を語るものと考えてよいであろう。そこで、以下、60歳代を高年層、中学生を青年層と呼ぶこととする。

調査は、動詞「行く」「帰る」「見る」「出る」「比べる」「来る」「する」の意志・勧誘・推量表現、形容動詞「賑やかだ」「静かだ」および形容詞「寒い」「暑い」の推量表現について行われている。「行く」を例として、本間氏の調査文を示しておこう。

- ① 「映画を見に行こう。」と友達に誘いかける言い方。
- ② 「俺も町へ行こう。」という言い方
- ③ 「もちろんあいつも行くだろう。」という言い方
- ④ 「たぶんあいつも行くだろう。」という言い方
- ⑤ 「おまえも行くだろう。」と尋ねる言い方
- ⑥ 「いや、たぶんあいつは行かないだろう。」という言い方
- ⑦ 「用事がなければ俺も町へ行っただろう。」という言い方

①は勧誘表現，②は意志表現，③は推量の根拠がある確信の強い推量表現（以下，確定推量という。），④はこれといった根拠はない場合の推量表現（以下，単純推量という。），⑤は相手の意志を確かめる場合の推量表現（以下，疑問推量という。），⑥は打ち消しの推量表現（以下，打消推量という。），⑦は過去の事柄に関する推量表現（以下，過去推量という。）を得ることを目的としている。

群馬県調査地点



- 1 利根郡水上町粟沢
- 2 利根郡片品村須賀川
- 3 利根郡片品村花咲
- 4 利根郡利根村根利
- 5 利根郡川場村川場
- 6 利根郡月夜野町上牧
- 7 吾妻郡中之条町四万
- 8 吾妻郡吾妻町植栗
- 9 吾妻郡嬭恋村田代
- 10 吾妻郡嬭恋村芦生田
- 11 吾妻郡長野原町羽根尾
- 12 吾妻郡六合村入山
- 13 群馬郡倉淵村川浦
- 14 群馬郡箕郷町駒寄
- 15 勢多郡富士見村大沢
- 16 勢多郡東村荻
- 17 勢多郡宮城村大沢
- 18 勢多郡赤城村敷島
- 19 山田郡大間々町諸町
- 20 佐波郡東村西小保方
- 21 新田郡新田町村田
- 22 邑楽郡大泉町下小泉
- 23 邑楽郡板倉町飯野
- 24 甘楽郡南牧村砥沢
- 25 甘楽郡下仁田町東野牧
- 26 甘楽郡甘楽町小幡
- 27 碓氷郡松井田町原
- 28 多野郡万場町万場
- 29 多野郡上野村乙父
- 30 沼田市碓田町
- 31 渋川市上郷
- 32 前橋市上泉町
- 33 高崎市巾居
- 34 桐生市西堤
- 35 桐生市菱町
- 36 太田市東金井
- 37 館林市羽附
- 38 伊勢崎市堀口
- 39 藤岡市南町
- 40 富岡市一ノ宮
- 41 安中市高別当

2 意志・勧誘表現における「ベイことば」の諸相と変化

群馬県方言の意志表現と勧誘表現は、ほぼ全域ペーによってなされていると言ってよい。そこで、以下、意志表現の資料で二つを代表させることとし、勧誘表現にのみ認められる形式が見られる場合についてののみ、それに言及する。

なお、勧誘表現の場合には、ペーの他にビャーが認められる。これはベイの後ろに助詞ヤが接続したペヤが融合して生じたと考えられるので、以下、ペーに含むこととする。

また、ペーやダンペーなどのベイことばは、時に末尾の長音拍が単呼化されることがある。以下諸形式の表記に際しては長音拍を省略する。

2-1 「行こう」一五段動詞の意志表現一

群馬県方言の実態を見る前に、平山輝男氏の全国の「行こう」の分布図によって群馬県のベイことばの位置を確認しておきたい。^(注3)

既に述べたように、ペー（ベシ・ベを含む）は東北地方の太平洋側、関東地方、静岡県に広く分布している。群馬県はその分布の西端に位置している。西に隣接する長野県はイカズとなっており、北に隣接する新潟県にもペーは分布していない。したがって、意志表現の形式については、群馬県は北と西の地域とは対立し、東と南に同じベイをもつ広い地域を擁しているのである。

さて、高年層では、県全域に「行く」の終止形にべが接続したイグベが分布している（分布図省略）。江戸期より変化することなくべが使用されていることになる。これは、群馬県に限ったことではなく、ベイことばが用いられている地域においても同じであると言ってよい。なお、群馬県方言においては「行く」はクが有声化してイグ（有声破裂音）と発音されるが、以下、イクと表記する。

このように絶大な勢力をもって県全域に分布しているイクベの中に、2地点ではあるがイクとペの間にはンを挿入したイクンベが桐生市の34と勢多郡の15に見られる。ちなみに、このイクンベは勧誘表現においても桐生市の34と35の2地点に見られる。このことから、イクンベは桐生市を中心にして新たに生じた形であると推定される。なお、先に述べた平山氏の図にもイクンベの形は見られるが、べと一括して扱っているので、この形が東日本のどの地域に分布しているのかは明らかではない。

次に、青年層の実態（分布図1）を見ていこう。

青年層の実態は、概略高年層と同様全県にべが分布しており、べは今なお健全である。ただし、共通語形イコーやイク(ヨ)、イカーなどのベイ系以外の形式で表現する地点が高年層よりかなり増えている。なお、青年層の「行く」はイグとイクの発音が認められる。ここではその差異には触れず、一括してイクと表記する。

さて、高年層で2地点に認められたイクンベは、青年層ではその地点数を5に増やしている。ちなみに、勧誘表現では6地点に見られ、意志表現の地点はほぼそれに重なる。ここで、意志・勧誘表現の高・青年層の4枚の地図を重ねてイクンベの現れる地点を見ると、35, 34, 19, 17, 14, 26, 22である。35, 34, 19, 17は地域が連続している。他の地点は連続してはいないが、あたかも半円を描いたような形で点在しているのが注目される。これらの地点では、従来のイクベからイクンベに変化した、あるいはしつつあるといえる。なお、イクンベが意志表現より勧誘表現にやや多く現れているのは、「ン」に起因しているのではないかと考えられる。

桐生市を中心に発生したと考えられるンベは少しずつその領域を広げつつあると言えよう。

イクベ→イクンベ

2-2 「見よう」 —一段動詞の意志表現—

高年層（分布図2）では、動詞「見る」の未然形ミにベが接続したミベが県全域に分布している。その中に、「行く」の場合と同じ接続をした形、すなわち終止形ミルにベが接続したミルベと、ルの拍が撥音化したと考えられるミンベが、その数は少ないものの全域に点在している。ちなみに、ミルベ7地点、ミンベ2地点で、ミルベの方が地点数は多い。なお、ルの拍が促音化したミッベは、r拍が促音化する傾向が顕著に認められる地域（利根郡）においても認められない。ミンベの地点がわずかに2地点であることに加えてミッベの形が現れていないのは、高年層のミルベがきわめて新しい形であることを示唆していると考えてよいであろう。

桐生市の34の1地点にはミンベと併用でミルンベが認められる。これは「行こう」がイクンベとなる地点である。ベの接続が「見る」の連用形から終止形に変化すると同時に、「行く」と足並みを揃えて生まれた形であろう。

次に、青年層（分布図3）の実態を見てみよう。高年層におけるミベとミルベ・ミンベとの勢力関係が、青年層では一気に逆転した様相を呈している。また、ミルベとミンベの分布を見ると、ミンベは高崎市・前橋市の都市に隣接する南の平坦地に多い。井上氏は東日本においてミベ→ミンベ→ミッペ→ミルベの変化を想定しておられるが、群馬県においては、高年層ではミルベ優勢、青年層ではミンベ優勢、しかもミンベは都市部に分布していることから、群馬県においてはミルベ→ミンベと考えた方がよい。

さて、ミルンベとなっている地点は2地点で、「行く」に比べて少ない。これは、ミルベ→ミンベの変化が、ミルベ→ミルンベの変化に先んじて生じたことによると考えられる。すなわち、既に撥音をもったミンベがさらにンを挿入してミンンベとなる可能性はほとんどないといつてよいことによる。

以上のことから、「見よう」の変化は次のように考えられる。

ミベ→ミルベ→ミンベ
→ミルンベ

さて、下一段動詞の「出る」の場合も「見る」の場合とほぼ同じ分布の様相を呈している。「見よう」の場合と異なる点についてのみここで述べておこう。

高年層では、ミルンベに相当する形のデルンベは全く認められない。

青年層では、高年層では認められなかったデルンベが4地点（35・17・14・6）に見られる。動詞によって終止形+ンベが現れたり現れなかったりしているのは、このンベが未だ安定した位置を留めていないことを示唆していると考えられる。

2-3 「来よう」 —カ変動詞の意志表現—

高年層（分布図4）には、東日本に分布しているすべての形が認められる。すなわち、クベ、コベ、キベ、クルベの四つである。

未然形にベが接続したコベは、吾妻郡に限って分布しているのが注目される。コベは吾妻郡方言といえようか。その吾妻郡を除く他の地域には、古い終止形「く」にベが接続したクベが勢力をもって分布している。一方、新しい終止形「くる」にベが接続したクルベは6地点（そのうち2地点は他の語形と併用）で、しかも点在していおり、「見よう」におけるミルベの地点より少ない。井上氏

によると、東日本においてはミベ→ミルベよりクベ→クルベの方がより早く変化が進んでいるとされるが、群馬県はその例には該当しない。

「来る」の上一段化によって生まれたと考えられるキベは、東と西の離れた地点に1地点ずつ認められる。これについては後に述べる。

さて、クベとクルベについては、クベ→クルベであることには異論を挟む余地はない。しかし、クベとコベの新古関係については両様考えられる。すなわち、一方は、井上氏が神奈川県付近に孤立して認められたコベを独自に未然形接続に変化したと考えられているごとくに、この吾妻郡のコベをクベより独自に変化したと考えるもの(クベ→コベ)。他方は、神奈川県のコベの存在と吾妻郡が他の多くの面に古い諸相を残していることを考え合わせて、コベをより古い相と考えるものである(コベ→クベ)。江戸時代の文献にはこの二つの形式が認められるが、コベの方がクベより優勢であるという^(註5)。言うまでもなく、国語史の上からは終止形接続のクベイが古く、未然形接続のコベイは新しい。江戸期にすでにコベイが優勢であったことを思うと、そのコベイと群馬県のコベとが結び付くのではないかとも考えられるのである。しかし、コベイが県全域に広がった後に、再び吾妻郡を除く広い地域でクベにもどった可能性と、吾妻郡のコベがクベから独自に変化した可能性を秤ると、前者のほうが可能性が大きいと言わざるをえない。コベの分布領域がいささか広くかつ安定していること、また、コベからの変化と考えられるキベが東の離れた地域に1地点ではあるが認められることから、コベ→クベの変化を即座には否定しにくい、クベ→コベと考えた方が妥当であろう。このように考えると、クベは江戸ではコベに駆逐されつつあったのに対して、群馬県(ただし、吾妻郡を除く。)においては依然勢力を保って生き続けたということになる。

さて、次にキベについて考えよう。先に述べたように、キベは東の東南端の22と西北部の11の2地点にのみに見られる。ただし、11はコベと併用。この形は「来る」の上一段化と深く関わっていると考えられる。

そこで、清水久美子氏の「来ない」の高年層の実態(図1)をここで見てみよう。^(註6)一段化していない地域、すなわちコネーとなる地域は極めて少なく、西北部の地点9と東部の利根郡の1・4・5と34のみである。群馬県においては「来ない」の場合はほとんどの地域でキネーとなっていると言ってよい。ただし、中年層になるとコネーとの併用地点が増え、そして青年層(図2)になるとコネーのみの地点と併用の地点が急激に現れ、キネーの勢力は高年層のおよそ3分の1になっている。「来る」の一段化傾向が最も強く認められた「来ない」においてこのような状態であることから、「来る」の一段化は次第に衰退する運命にあると考えられる。動詞の活用は歴史的には単純化への道を進んできており、その点から言えば、高・中年層の一段化の動きは自然な変化であった。それにかかわらず、再びもとの相にもどる様相を示している。これは学校教育あるいはマスメディアの発達によるものと考えてよいであろう。

さて、キネーがこれほど強い勢力をもって分布しているにもかかわらず、コベが分布する吾妻郡にキベの地点が極めて少ないのはなぜであろうか。これは、吾妻郡においては「来ない」がコネーからキネーに変化する以前に、「来よう」がクベからコベへの変化を起こしたということを示唆していると考えられる。なお、大橋勝男氏の『関東地方方言事象分布図』^(註7)を見ると、「来る」の終止形、連体形の一段化を起こしている地域は、未然形のそれに比べてきわめて少ないことがわかる。

次に、青年層(分布図5)について見てみよう。

高年層においてはベイ系の形はクベ・コベ・キベ・クルベであったが、青年層になるとそれらに、ルの拍が撥音化したクンベ(3地点)、クルとベの間に撥音を介したクルンベ(6地点)、「くる」が一段化したキルベ(2地点)が加わり、多様になっている。

中でも、クルベの勢力が高年層より拡大し、その上にクルンベという新しい語形が加わってクベ

の勢力を端に押しやりつつある様相を呈している。

キベも高年層より多くなり、特に吾妻郡で増えている。吾妻郡において増えているのは、高年層がコベであることからキベになりやすかったことによると考えられる。

また、吾妻郡には、他の地域では勢力を弱めつつあるクベが入ってきているのが注目される。吾妻の方言であるコベと群馬県の標準語であったと目されるクベとが併用されている。また、いち早く吾妻郡の玄関口にあたる地点7(中之条町)には、都市部を含む中部で勢力を伸ばしているクルンベも併用ではあるが入っていきっている。しかしながら、吾妻郡のコベは新しい形を受け入れながらも消滅しないのは、先に見た「来ない」でのキネーの衰退、コネーの復活が影響していると考えられる。

以上、高年層および青年層の実態から、「来よう」のベイ系の変化は次のように考えられる。

クベ→クルベ→クルンベ
 ↓ →クンベ
 コベ→キベ→キルベ

2-4 「しよう」 —サ変動詞の意志表現—

高年層の実態(分布図6)から見ていこう。

「しよう」にも「来よう」の場合と似て多様な形が認められる。すなわち、スベ、シベ、スルベ、シルベ、スンベである。

群馬県北部、すなわち吾妻郡および利根郡の地域と地点30(沼田市)にシベが安定して分布している。その他の地域にはスベが勢力をもって分布している。そのスベの領域の中に、シベを併用する地点が、おおよそ街道沿いにあたかも連続しているように並んでいる。

江戸期の資料にもシベイとスベイのいずれもが現れているが、シベイの方が優勢であるという。^(注8) 国語史の上からは、「来る」の場合と同じように、スベイが古く、シベイは新しい。

さて、「来る」の場合のコベは西北部に偏っていたのに対して、「する」の場合のシベの地域は割合広く、というよりも地点数が多い。そしてなによりも県中央を縦断する街道沿いにあることから、スベ→シベの変化が考えられる。かつては群馬県は全域スベであったが、その後、江戸でスベから変化したシベが街道沿いに伝播してきたのではないかと想像されるのである。しかし、「する」の場合も一段化と関わる事項なので、「する」の上一段化について見てから、再び考察することにした。

大橋勝男氏の分布地図で、^(注9) 「する」の終止形と連体形の分布地図を見てみると、いずれもがシルとなる地域は、群馬県では北部の吾妻郡と利根郡およびその隣接地域である。また、連体形のみがシルとなる地点が東南端の地点(37に相当)あり、また中南端の地点(38に相当)にある。これは、シベとなっている地域や地点とほぼ一致している。さらに、仮定形「すれば」が、シレバとなる地点を加えると、シベとなる地域および地点を覆うことになる。したがって、シベの地点は「する」が一段化の動きを生じている地域であると言える。

以上のことから、スベ→シベの変化と考えるのことは変わりがないが、それが江戸から伝播したとは考えるより、「する」の一段化の影響によって生じたと考える。このように考えると、スガスルとなる以前にサ変動詞の一段化が始まったと判断される。

その他の形についても見ておこう。

新しい終止形「する」にベが接続したスルベおよびルが撥音化したスンベが、5地点に見られる。シルベが西北端に位置する嬭恋村の1地点のみに見られる。これはシベと隣接していることから、シベ→シルベとなったと考えてよいであろう。

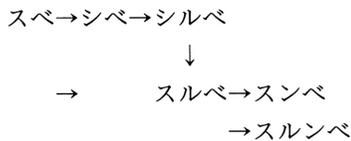
次に、青年層の実態（分布図7）を見てみよう。

青年層では、高年層で見られたスベ、シベ、スルベ、スンベの他に、スルンベが認められる。なお、高年層の1地点で見られたシルベはなくなっている。これは、青年層では動詞「する」の一段化が「来る」と同じように衰退しはじめていることと深く関わっていると考えられる。

高年層ではシベが分布していた吾妻郡の中であって、孀恋村のみがスルベになったいる。高年層がシルベであったので、スルベに変化することは極めて容易であったのであろう。なお、吾妻郡の地点11・7ではスベとシベが併用されている。

スルベがかなりの勢力で広い地域に分布している。これが定着して後にスンベを生んだのであろう。

スルンベは地域的に連続していない3地点に見られるが、最も新しい形と考えられる。以上のことから、「しよう」の変化は次のように考えられる。



3 推量表現における「ベイことば」の諸相と変化

3-1 「賑やかだろう」一名詞（相当句）の推量表現一

本間氏の資料には名詞の推量表現についての資料はないので、それにもっとも近いいわゆる形容動詞の「賑やかだ」の推量表現にあらわれる「ベイことば」の諸相とその変化を考察する。

この項目は、高年層・青年層ともほとんど同じ分布を示し、かつ単純な分布である。そこで分布図は青年層のもののみ示す（分布図8）。

高年層では、県東北部に促音をとるニギヤカダツベが分布しているが、他の地域はすべてニギヤカダンベである。青年層では、促音をとるニギヤカダツベの地点は高年層のそれとは多少ずれるが、ほぼ同じ分布状態である。このように、名詞および名詞相当句の推量表現では、ダンベ、ダツベがきわめて安定して用いられているといえよう。ただし、青年層では高年層には見られなかったニギヤカダベが、東南端の1地点に現れているのが注目される。この地点23では、高年層がダンベであることから、ダンベ→ダベの変化を生じたことになる。

ここで、井上氏によって東日本の「雨だろう」の分布を見ると、ダンベは栃木から神奈川にかけての関東西部に分布領域をもち、ダツベは福島県東南端から千葉県にかけて太平洋岸に連続して分布している。その他の東北六県と長野県秋山郷にはダベが分布している。この分布から、氏はダツベ、ダンベは「にてあるべき」から生じ、ダベはダンベから生じたときれている。

群馬県においても同様の变化過程を考えてよい。国語史研究の成果を加えると、ダンベやダツベが誕生した過程がきわめてよく理解される。^(注10)

にてあるべき→であるべい→ダンベ（ダツベ）→ダベ

3-2 動詞の推量表現の諸相と変化

群馬県方言の動詞の推量表現の形式には、ベイ系のベイ類とダンベイ類の両方が認められる。な

お、ベイ類とダンベイ類の両形式を用いる地点の中には、その二つに何らかの異なる働きを担わせようとする傾向が認められる地点もある。本間氏はその傾向を、確定推量と単純推量であると予想している。確かに、資料を見ると確信の強い推量と単なる推量との差異と考えられる地点も認められるが、待遇価値の差異と考えられる地点もあることが知られている。これについての考察は今後の課題とし、本稿では③の調査結果を用いて、以下、考察を進めることにする。ちなみに、③と④の分布図はおおよそ同じ様相を呈している。

3-2-1 「行くだろう」

高年層（分布図省略）の実態は、先に見た「賑やかだろう」の場合とほぼ同じで、イクダンベとイクダッベが分布している。「賑やかだろう」と異なる点は、イクダンベ（ダッベ）が全域を覆っている中に、意志表現に用いられていたイクベが3地点に認められる点である。西北端の10、中央の都市部の北に位置する15、東南端の23がそれである。「帰るだろう」の場合のべをとる地点を見ると、10・11・30・23である。西北端と東南端の2地点は、意志表現と同じ形が推量表現にも安定して用いられているといえよう。

高年層の分布からは、イクベ→イクダンベの変化が考えられる。古くは、助動詞「べし」がいわゆる意志にも推量にも用いられていたことを思えば、この変化は当然のことである。しかしながら、次に見る青年層の実態ではイクベの地点数が増えていることから、かなり古くに群馬県全域でイクベ→イクダンベの変化を生じた後に、再びこの3地点ではイクダンベ→イクベの変化を起こしたとする可能性も残されている。これについては、青年層の実態を見た後に、再び考察する。

青年層（分布図9）に現れるベイ系の形式は、高年層で見られたイクダンベ、イクダッベ、イクベの他に、イクンダンベ、イクンベ、イクッベが加わり、多様になっている。

高年層では全域を覆っていたイクダンベは、その領域を狭め、県の中央部を中心に分布している。一方、高年層ではわずかに3地点であったイクベが6地点にその数を増やしている。しかも、いずれも県の周辺地域である。西北部にはイクベの他にイクンダンベが分布。東部の利根郡にはイクベの他にイクッベが現れている。また、東南の地域にこれもまた高年層では見られなかったイクンベがかなりの領域をもって分布している。

高年層と青年層の分布図を対照してみると、高年層でイクダンベ（ダッベ）の地域とイクベの地域の変化には、以下の方向が認められる。

| | |
|---|----------------------|
| イクダンベ=イクダンベ →イクンダンベ(イクンダッベ) →イクベ →イクンベ(イクッベ) | イクベ→イクダンベ →イクンダンベ |
|---|----------------------|

以上のことから、高年層のイクベは江戸期のもものが残存していると考え、青年層のイクベは新たに生まれたイクベと考える。したがって、「行くだろう」の変化は、次のようになると考える。

イクベ→イクダンベ→イクンダンベ
 →イクベ→イクンベ

さて、ここで東日本の分布を平山氏の「降るだろう」の図^(註12)によって見てみると、次のようである。フルベが東北と北関東に広く分布し、また神奈川付近にも飛び地のようにある。フッベは福島・茨城の太平洋岸に点在している。フルダンベは群馬から千葉にかけての関東中部を縦断している。千葉南端にフルダッベもある。井上氏は、このようにフルベとフルダンベがABA分布を見せていることから、ベ→ダンベと考え、ダンベは江戸語・東京語のダローとの接触によって生じたとされて

いる。

このように、東日本の分布からもベ→ダンベの変化が考えられた。しかしながら、群馬県においては、ベ→ダンベの変化で留まることなく、さらに変化し続けているのである。

3-2-2 「見るだろう」

五段活用以外の動詞の推量表現の分布図は、きわめて類似した分布をしめしている。そこで、ここでは「見る」を中心にして考察を進める。

さて、高年層（分布図10）では、県全域をミルダンベ（ダッベ）が覆っている。その中にあって、県の周辺の地域に意志表現と同様の形式をとる地点が4地点認められる。すなわち、11・23はダンベと併用で意志表現と同じミベが、28はミベのみが現れている。また、9では意志表現と同じミンベが現れている。「行くだろう」の場合と同様に、意志表現と同形をとるのが古く、ダンベ・ダッベはそれより新しいと言える。

青年層（分布図11）では、依然ミルダンベが勢力を保ってはいるが、県の東端を縦断するようにミルッベ、ミルンベがそれなりの領域をもって分布しはじめている。これまで見てきた地図と同様、ミルダンベ→ミルッベ、ミルダンベ→ミルンベの変化を起し始めていると考えてよい。

以上のことから、「見るだろう」の変化は次のように考えられる。

ミベ→ミルベ→ミルダンベ（ミルダッベ）→ミルンベ（ミルッベ）
→ミンベ

なお、27のミルンベは、「見るのだろう」に相当する形であると考えられる。「行くだろう」の場合のイクンダンベも「の」を介した表現に相当すると考えられるが、残念ながら、調査の項目には「見るのだろう」や「行くのだろう」の項は入っていない。ちなみに、「来るだろう」「するだろう」の場合も、青年層においてはクンダンベとスルンベが現れており、しかもそれらはいずれもンベとダンベの接触地点に認められる。このことから、「のだろう」に相当する表現が現れたと考えられるよりも、二つの形式の混交形と考えた方がよいのかも知れない。これについては今後の課題としたい。

井上氏の東日本における一段動詞の推量表現「起きるだろう」を見ると、次のようである。オキッベが宮城・福島・栃木に、オキルベ（オキンベ）が東北大部分と関東の西端に分布し、オキベが東北各地と関東各地に点在している。オキルダンベは神奈川から群馬にかけて分布し、オキルダッベが千葉にある。

これを「見るだろう」に読み替えてみると、ミッベ、ミルベ（ミンベ）、ミベ、そしてミルダンベ、ミルダッベとなる。群馬県下にはミッベを除くすべての形式があり、かつ新しい形式のミルンベ、ミルッベが加わっているのである。

3-3 「寒いだろう」—形容詞の推量表現—

群馬県方言には、形容詞の推量表現の場合にも多様な形式が認められる。すなわち、サムカンベ・サムカッベ、サムイダンベ・サムイダッベ、サムイッベである。なお、サムイは地点によっては連母音が融合してサミーとなっているが、サムイに含むこととする。

さて、高年層（分布図12）では最も語源「寒むかるべき」に近く、したがって最も古い形と考えられるサムカンベが全県に分布している。その中に、サムイダンベが全県に散在している。ただし、前橋市や高崎市の都市部を中心とする地域では、サムカンベが依然勢力であり、サムイダンベを拒

否している感がある。

1地点(30)にはサムイッペがサムイダンベとサムイダッペと併用で認められる。なお、サムカッペ、サムイダッペのように促音の形をとる地域は、やはり利根郡と沼田市に限られている。

次に、青年層(分布図13)の実態を見るとその様相が一転し、きれいな地域分布が認められる。サムカンベは県西南端の山間部の地域と西北部の山間地9にのみに認められるだけとなり、前橋市や高崎市の都市部を中心とする西部の広い地域にサムイダンベが分布している。なお、1地点にサムイダンベおよびサムイベと併用でサムインダンベがある。

伊勢崎市より東には北から南までサムイッペ、サムイベが分布している。その領域の中にンを挿入したサムインベが、やはり桐生市を中心とした地域に認められる。

なお、サムイッペは利根郡を中心に東北部に、サムイベは東南部に分布する。また、サムイベは県の西北部に分布し、そしてその中の1地点にはサムインベが認められる。

以上の二つの年代層の分布から、「寒いだろう」の変化は次のように考えられる。

サムカンベ→サムイダンベ→サムイベ→サムインベ
→サムイッペ

なお、中年層の地図を加えて見ると、サムイダンベを経ずに、サムカンベからサムイベに変化したと考えられる地点ももちろん認められる。

以上の変化は都市部ではなく、県の周辺部から生じていることが注目される。サムカンベに関しては都市部のことばは保守的である。これは都市部のことばが地域(県)共通語として存在していることが、保守的な行動をとらせたとみてよいであろう。

3-4 「行っただろう」

井上氏によれば、東日本において助動詞「た」が介在したベイ系の形式は、「行っただ」の部分で「雨だ」の場合の「雨」に取り替えて考えれば、ベイの諸形式の分布は「雨だろう」の分布と非常によく一致するという。そこで「雨だろう」に近い「賑やかだろう」の分布地図(分布図8)と比較して見ると、そこには極めて大きな違いが認められる。すなわち、「賑やかだろう」では高年層・青年層ともにダンベ(ダッペ)であったのに対して、「行っただろう」(高年層分布図14・青年層分布図15)では、イッタダンベの地点は極めて少なく、県全域にイッタンベが分布しているのである。しかも、ダンベは高年層の方が少なく、青年層の方がやや多くなっている。この二つの分布図からは、イッタンベ→イッタダンベの変化が考えられるが、ここで即断せずに、他の動詞の過去推量の実態を見てみたい。

調査されたすべての動詞に現れたベイ系の形式について見てみると、すべてがンベである地点は高・青年層のいずれにも多く認められるが、すべてがダンベである地点は青年層に1地点認められるだけである。高年層に限って見てみると、北部の吾妻郡と利根郡の地域はダンベが優勢である。特に、利根郡の地点2・4・5と吾妻郡の12は、ほとんどの動詞がダンベをとっている。この地域は、地理的位置からしても、他の言語の分野における特徴を考慮しても、古い相を残している可能性がきわめて高い地域である。しかも、その地域の青年層ではほとんどがンベとなっている。県の都市部およびその周辺では、高年層・青年層ともにすべてがンベをとっている地点が多く認められる。また、動詞の種類から見ると、おおよそ五段活用動詞よりも、それ以外の動詞にダンベが多く現れていると言える。特に、「する」には最も多くダンベが現れている。

以上のことから、ンベ→ダンベよりもダンベ→ンベの変化を考える方が妥当である。また、五段活用動詞の方が他の動詞、特に変格動詞よりも先んじて変化を起ししやすいと言えよう。

なお、「行っただろう」の分布図には現れていないが、「出る」「する」「来る」の青年層において、「行っただろう」には見られなかった形式、すなわちを介さずに直接過去形にべがつく地点が認められる。栃木県に隣接している地点23（板倉町）がそれである。ここでは、シタベ、デタベ、キタベとなっているのである。ちなみに、他の動詞の過去推量はベイ系をとらず、例えばイッタンジャンネンなどのようになっている。この地点は、県内では東日本で雨ダベ、イッタベが分布する東北地方に最も近い地点である。

イッタダンベ→イッタンベ→イッタベ

4 まとめ

群馬県方言の意志（勧誘）表現と推量表現にあらわれるベイ系の諸相と分布を把握し、その変化を考察した。先に述べたように、群馬県方言には東日本のベイ系の諸相のほとんどが認められ、かつ、青年層においては新たな形式が誕生していることが明らかとなった。井上氏が東日本のベイ系の実態からその変化を考察されたが、群馬県方言における変化も、二三異なる場合が認められたが、おおよそそれと同じであった。

「来る」「する」が上一段化への動きを始めた時期も、相対的時期であるはあるが、ベイ系の変化過程を考察する過程で明らかにすることができた。

ここでは、以上のことを詳細に述べることはせずに、意志表現と推量表現の実態を総合して、群馬県方言ベイことばの変化の大きな流れについて述べ、まとめとしたい。

意志表現のない名詞（名詞句相当）の推量表現は、群馬県方言においては、「～にてある」からの助動詞「だ」の誕生に伴って現れたダンベ（ダッペを含む。）によってもっぱらなされている。また、形容詞の推量表現は、カリ活用にベイが接続した「～かるべい」から生じたカンベ（カッペを含む。）によって現在まで変わらずに行われているといえる。しかし、次第に終止形にダンベを接続させた形が優勢となり、名詞と同じ道を歩み始めている。

次に、意志表現がある動詞の場合の流れについて見てみよう。群馬県方言においても、かつては意志表現も推量表現もべによってなされていたと考えられる。その後、先にも述べた過程を経て誕生したダンベが動詞にも用いられるようになり、推量表現はべとダンベの二つの類を所有することになった。東北の広い地域では、今なおすべての動詞の終止形に直接べを接続させて、意志および推量の表現をしている。ちなみに、名詞の推量表現の場合にも直接べを接続させる方向へ進んでいる。それに対して、群馬県では動詞の推量表現にも名詞の場合と同じようにその終止形に直接ダンベ（ダッペ）を接続することによって、意志表現べ／推量表現ダンベの言い分けをする方向へ進んだのである。井上氏は、これを近代東京語における「う・よう」と「だろう」の使い分けと平行的なもので、新しい変化としておられる。さて、県の周辺の間部では、古い相を留めている傾向が認められたが、そこでも県の大勢を占める方向への変化を余儀なくされた。こうして生まれたベイ類とダンベ類による意志と推量表現の言い分けが、今もかなり広い地域で行われているのである。

しかし、群馬県においては、その状態には留まらず、さらにベイ系の諸形式は変化を続けていることが明らかになった。すなわち、ベイ類一つからダンベ類を導入したにもかかわらず、今、県東部を中心にダンベ類を放棄し、再びベイ類のみになろうとする新たな変化が生じているのである。これは、東日本の広い地域でも認められる助動詞ベイの助詞化の動きと平行していると考えられる。ただし、ベイ類といってもかつての形式をとる地域は狭く、新しいベイ類の形式、すなわち撥音

ンを添えた形でのベイ類への復帰である。

さて、新しい形でのベイ類への復帰は、一見すると意志と推量の言い分けが再びなされなくなるのではないか、あるいはなくなったのではないかと思わせる。しかし、意志表現と推量表現の分布図を重ねて見ると、青年層においても、依然としてその言い分けを保持している傾向がかなり認められる。ただし、本稿ではまったく触れなかったベイ系以外の表現形式—これは年代が下がるほど増えているのであるが—を見ると、ここには同一の形式が意志表現にも推量表現にも用いられているものも少なくない。また、疑問表現が意志や推量表現にも及んでいる傾向が強い。

ベイ類への新たな復帰をはじめている東部地域は、県内ではもっとも東北地方に近い地域である。譬えていえば、装う物は東北地方の影響を受け始め、それを装う主体は群馬県人といえようか。なお、この新しいベイ類への動きの兆しは東部に留まらず、かなりの地点で認められる。新しいベイ類の特色である撥音ンは群馬県人にとっては、極めて懐かしい響きをもつ音声であるのかもしれない。

以上、大きな変化の流れを述べたが、言うまでもなく現実はいわゆる複雑な様相を呈している。群馬県方言の意志・推量表現が、まさに変化の中に、今もあることがわかる。それぞれの項目で、それぞれの変化の過程を考察したが、その変化の速度は地点によっても、話者によっても、語によっても、同一ではないのである。このような状態にあることがらについて、1地点1名の話者で代表することには、やはり問題は残ろう。また、今回言及しなかったベイ系以外の諸形式をも含めて、改めて群馬県方言の意志・勧誘・推量表現の実態を明らかにし、その特色を見極めたい。

(注1) 井上史雄「現代東日本のベイの分布と変化」(『新しい日本語—《新方言》の分布と変化』明治書院, 1985年)

(注2) 本間芳枝「べい言葉の研究」(昭和58年度群馬県立女子大学国文学科卒業論文)の資料編による。本間氏は調査地点の中から11地点を選び、意志・勧誘表現と推量表現の形式の対立・非対立に注目して考察を行った。

分布図は氏の資料によって作成した。その際、ベイ系と併用されている共通語などの形式は記さなかった。なお、ベイ系の形式がない地点は未調査地点と区別するために、「ベイ系以外のみ」として表示した。

(注3) 平山輝男「東部方言概説」(『方言学講座二 東部方言』東京堂, 1961年)参照。

(注4) ただし、井上氏の例示は「見よう」ではなく「起きよう」である。

(注5) 此島正年『国語助動詞の研究』(桜楓社, 1979年増訂版)参照。

(注6) 清水久美子「群馬県方言におけるカ変・サ変動詞の上一段化についての考察」(昭和58年度群馬県立女子大学国文学科卒業論文)の資料編所収の分布図による。

(注7) 大橋勝男『関東地方方言事象分布図 第二巻』(楓桜社, 1976年)のMap.36によると、キルとなる地域は群馬県下には全く認められず、関東地方では茨城県北部の地域と栃木県の北端の1地点のみである。

(注8) (注5)に同じ。

(注9) 大橋勝男氏の(注7)の著書のMap.43・46・47参照。

(注10) 先覚の研究により、西日本方言のチャと東日本のダは、いずれ「にてある」から生まれたとされる。ダンベ(ダッペ)は直接にはダルベイから生まれたと考えるとよいであろう。

(注11) 中条修・篠木れい子『六合村の方言』(群馬県吾妻郡六合村教育委員会編, 1991年)によれば、群馬県吾妻郡六合村の北部地区では、推量表現におけるべとダンベは次のように使い分けられている。べよりダンベの方が待遇価値が高い。これは、ダンベがべより新しい形態であることに起因していると考えられる。

ところで、本間氏の資料をみると、べとダンベ(ダッペ)が確定推量対単純推量の傾向を見せ

る地域と、これとはまったく逆の傾向を見せる地域が認められる。前者はベが意志表現と通ずることに、後者は断定の助動詞「ダ」に、話者の心が向いていると考えられる。

なお、古語「べし」はいわゆる推量の助動詞といわれているが、山口堯二氏（「推量体系の史的変容」『国語学』第165集）は、「べし」を「何らかの道理・証拠・状況などに依存しながら、事柄のありようをむしろ認定する作用を表わす」とし、「む・らむ」などを「推量」呼ぶのに対して「推定」と呼んでおられる。

(注12) (注3)に同じ。

[付記]

本稿を成すにあたって、貴重な資料を提供して下さった本間芳枝氏、そして氏の話者となって調査に協力して下さった多くのかたがたに心より感謝申し上げます。

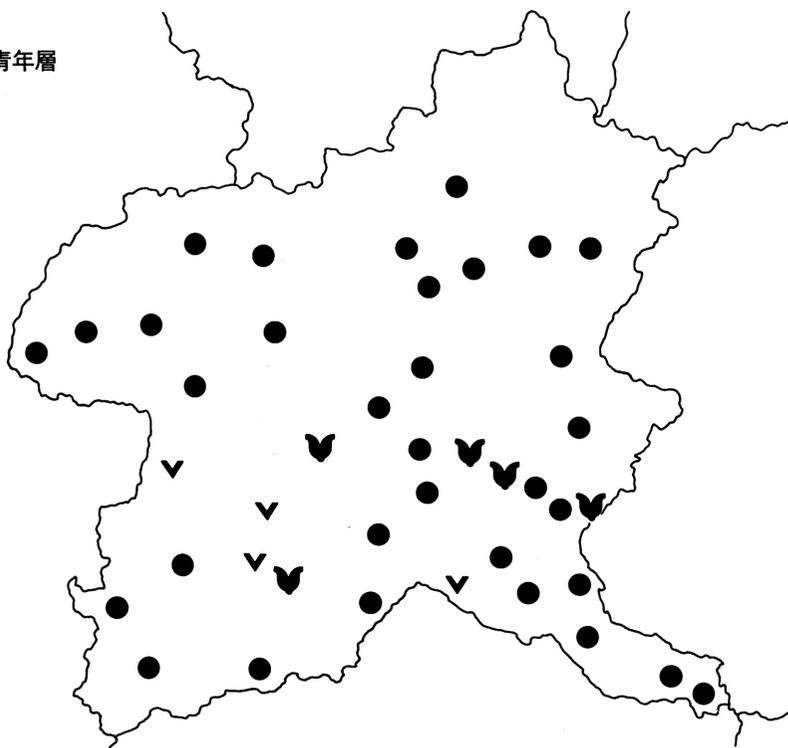
また、井上史雄氏のご研究に多大な恩恵を蒙っていることを改めて記し、謝意を表します。

[補則]

本稿を成した後に、次の文献を見ることができた。佐藤高司『《新方言》の動向—北関東西部における高校生のことばの研究—』（1993年3月、上越教育大学大学院学校教育研究科修士論文）がそれである。氏は群馬県内では19地点について、高校生を対象にベイことばを調査し数量化している。筆者が新しいベイ類と呼んだンベの形式を新方言と位置付け、「①ンペーという新方言はベイの接続の単純化（終止形への変化）の過程で生まれたと思われる。②類推によって、新しいペーと全く同じ意味領域を持ち、使われ方をすること、③群馬では東部で早く使用されていること、などがわかった。」とされている。

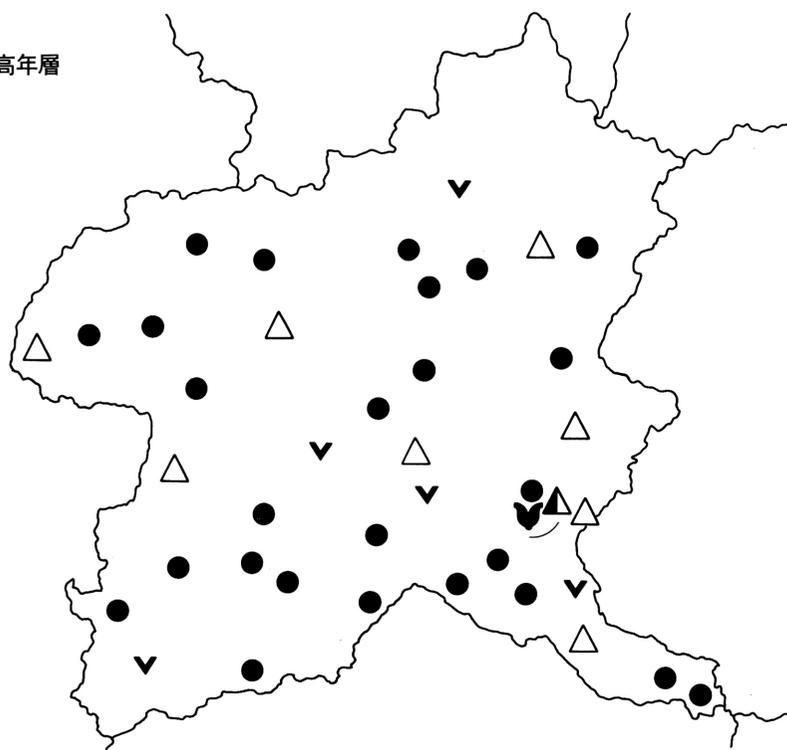
分布図1 「行こう」青年層

- イクベ
- ▼ イクンベ
- ▼ ベイ系以外のみ



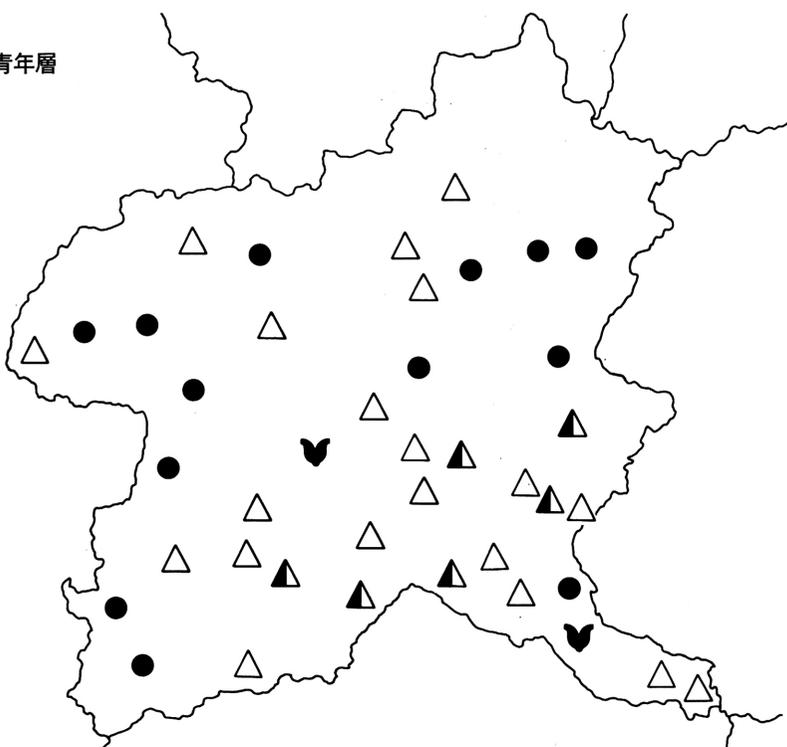
分布図2 「見よう」高年層

- ミベ
- △ ミルベ
- ▲ ミンベ
- ▼ ミルンベ
- ▼ ペイ系以外のみ



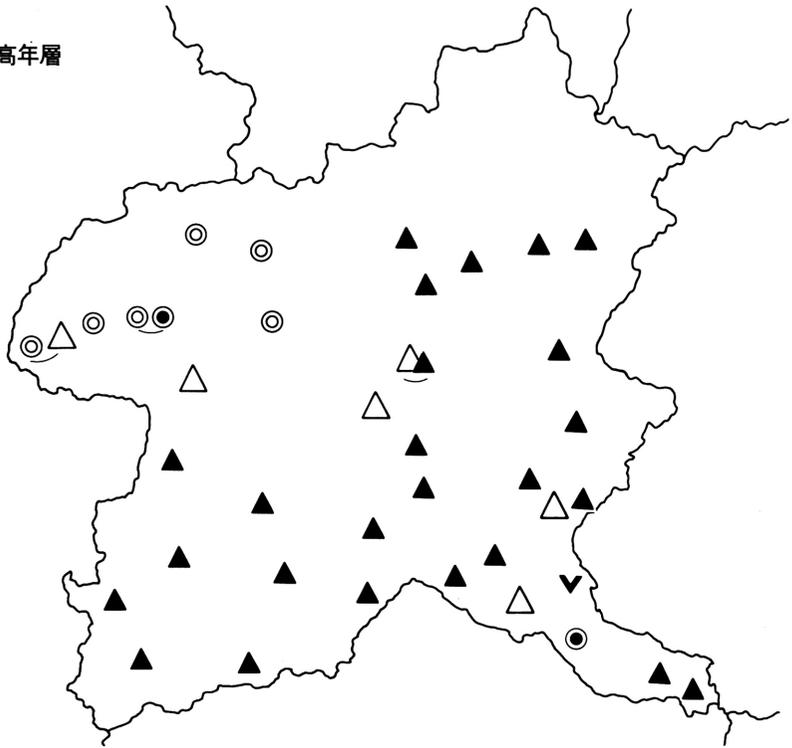
分布図3 「見よう」青年層

- ミベ
- △ ミルベ
- ▲ ミンベ
- ▼ ミルンベ



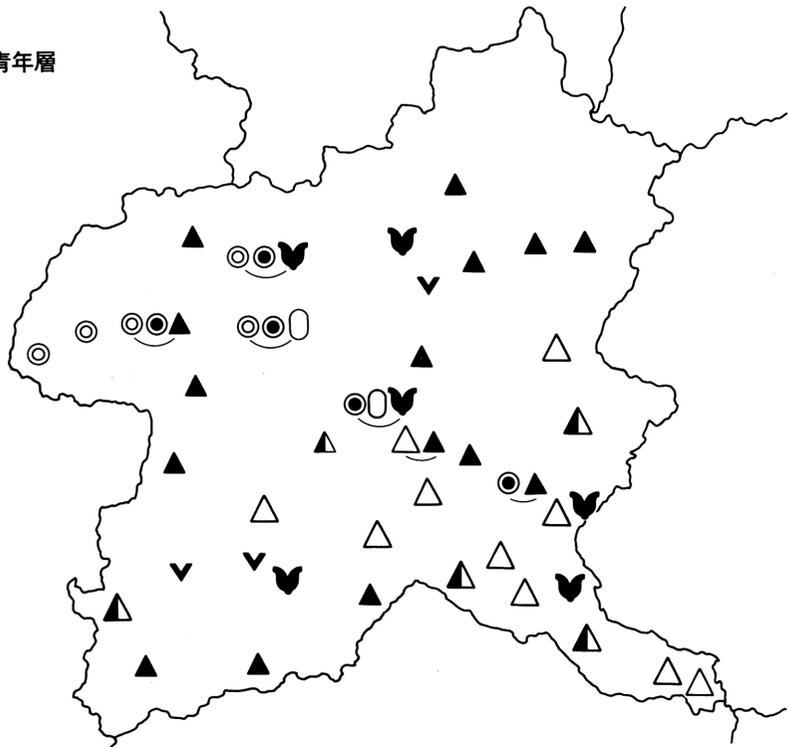
分布図4 「来よう」高年層

- ▲ クベ
- △ クルベ
- ◎ コベ
- キベ
- ▼ ベイ系以外のみ



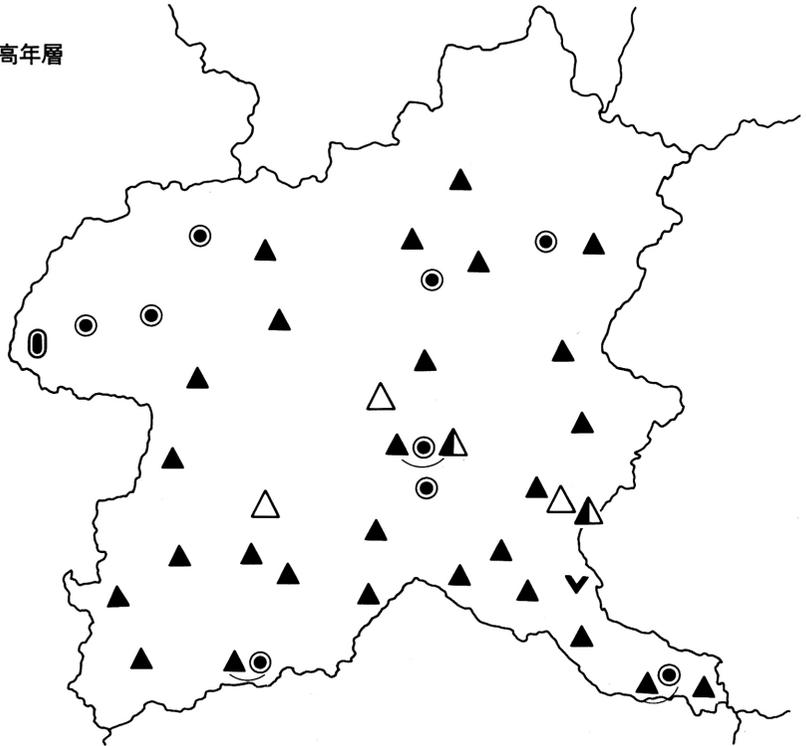
分布図5 「来よう」青年層

- ▲ クベ
- △ クルベ
- ▲ クンベ
- ▼ クルンベ
- ◎ コベ
- キベ
- キルベ
- ▼ ベイ系以外のみ



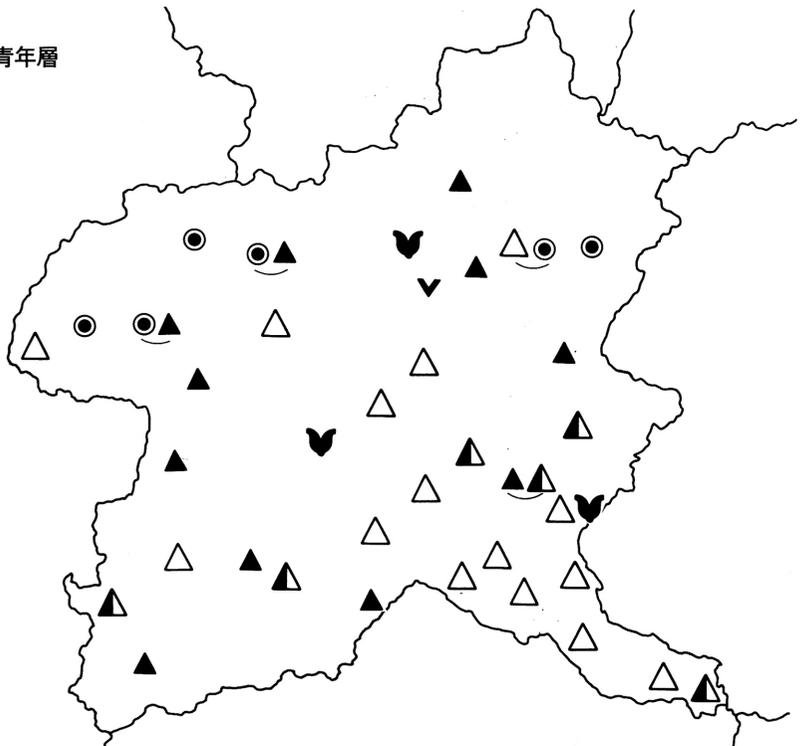
分布図6 「しよ」高年層

- ▲ スベ
- △ スルベ
- ▲ スンベ
- シベ
- ◐ シルベ
- ▼ ベイ系以外のみ



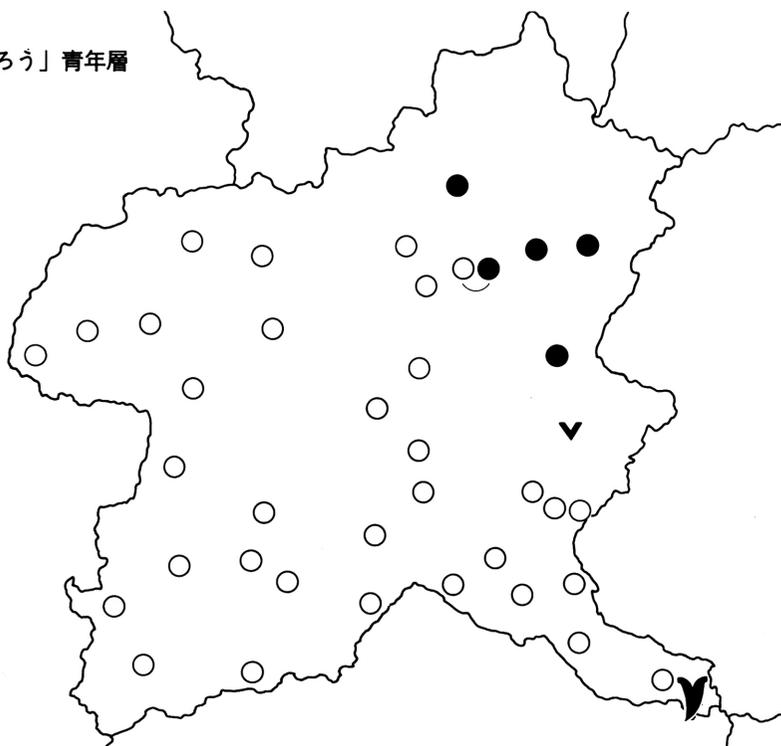
分布図7 「しよ」青年層

- ▲ スベ
- △ スルベ
- ▲ スンベ
- ▼ スルンベ
- シベ
- ▼ ベイ系以外のみ



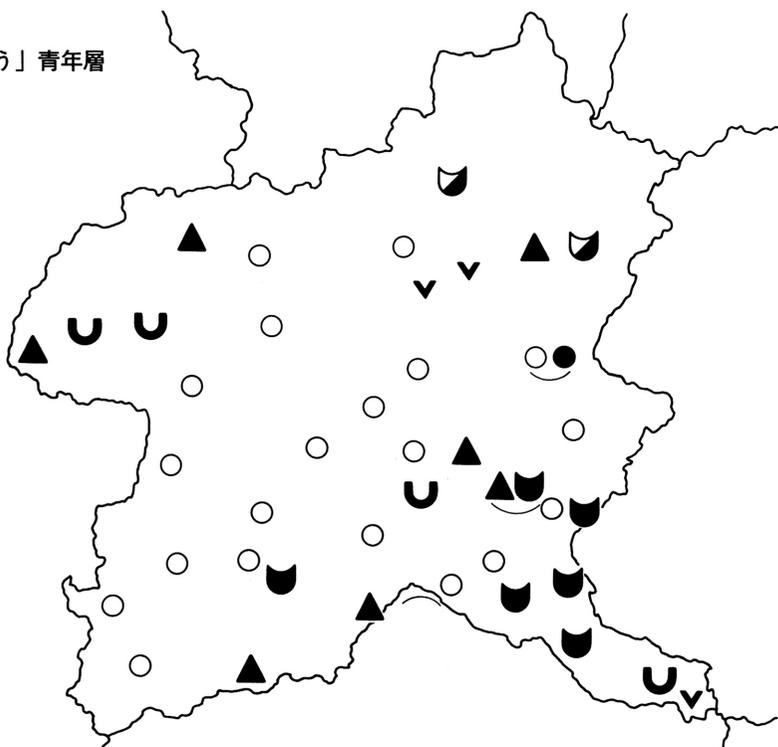
分布図8 「賑やかだろう」青年層

- 賑やかダンベ
- 賑やかダッペ
- ▽ 賑やかダベ
- ▼ ベイ系以外のみ



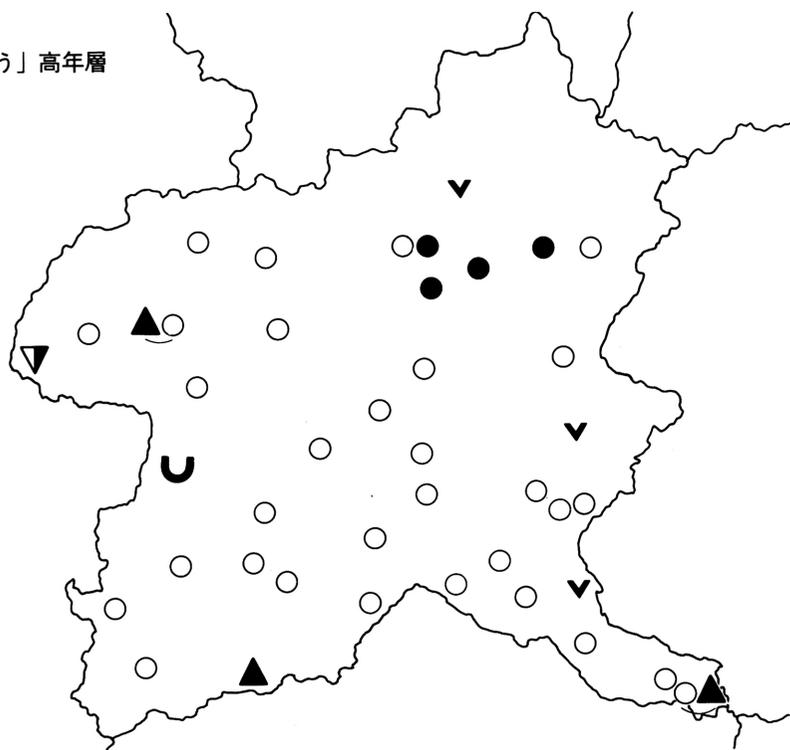
分布図9 「行くだろう」青年層

- ▲ 行くベ
- ◐ 行くンベ
- ◑ 行くッペ
- 行くダンベ
- 行くダッペ
- ◒ 行くンダンベ
- ▼ ベイ系以外のみ



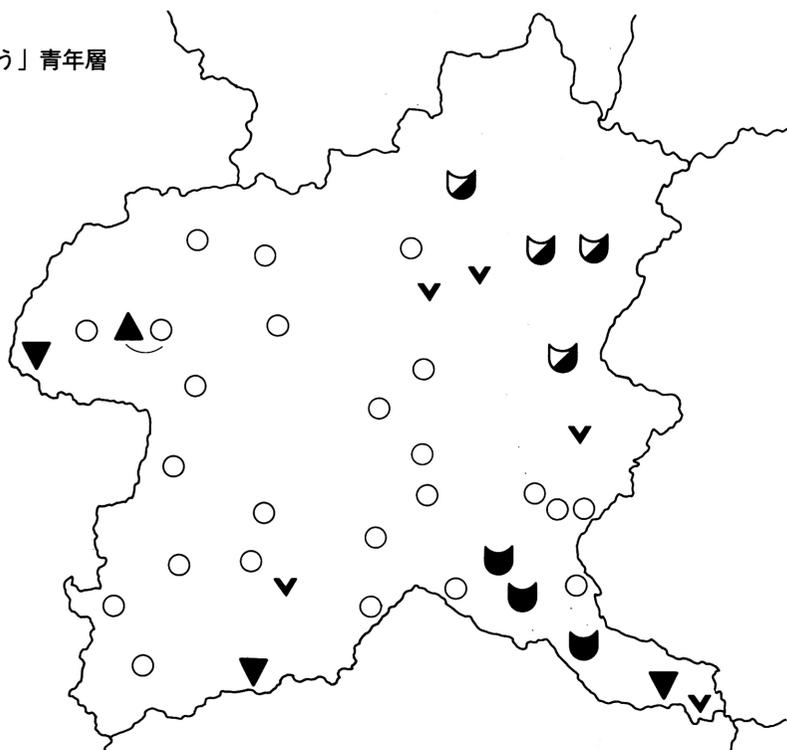
分布図10 「見るだろう」 高年層

- ▲ 見ベ
- ▼ 見ンベ
- 見るダンベ
- 見るダッベ
- ∪ 見るンダンベ
- ▽ ベイ系以外のみ



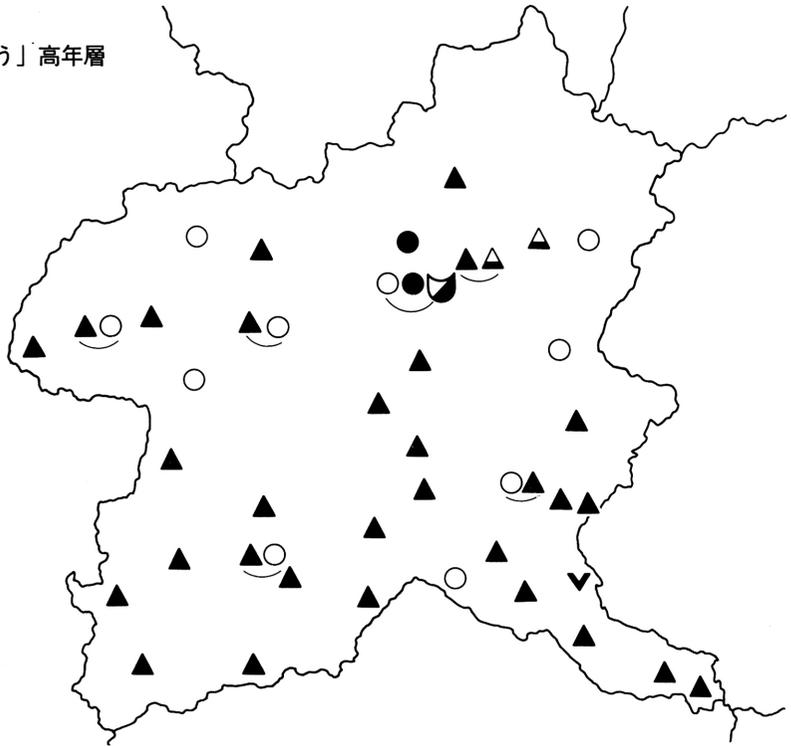
分布図11 「見るだろう」 青年層

- ▲ 見ベ
- ▼ 見るベ
- ◐ 見るンベ
- ◑ 見るッベ
- 見るダンベ
- ▽ ベイ系以外のみ



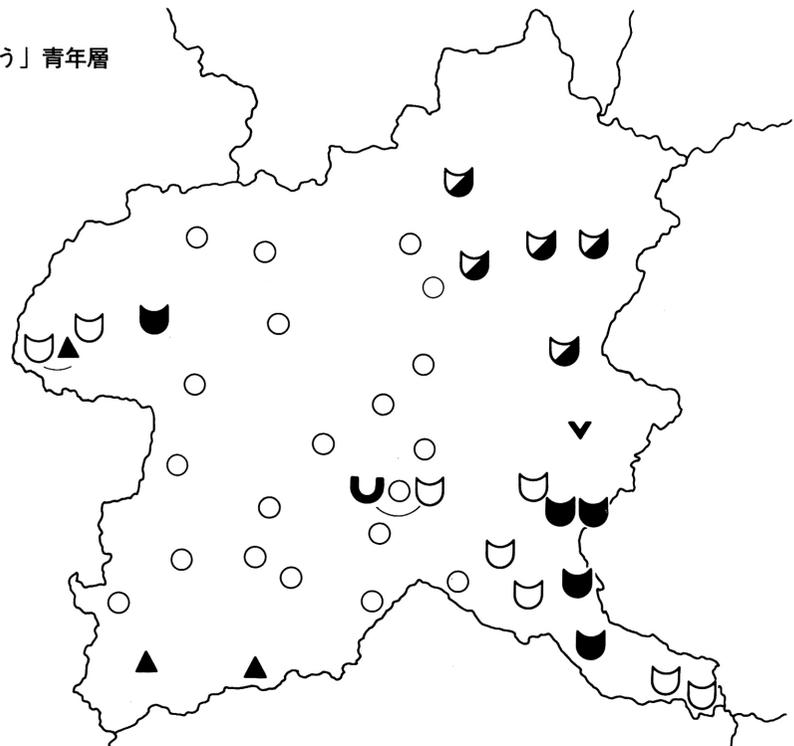
分布図12 「寒いだろう」高年層

- ▲ 寒カンベ
- △ 寒カッペ
- 寒いダンベ
- 寒いダッペ
- ☾ 寒いッペ
- ▼ ベイ系以外のみ



分布図13 「寒いだろう」青年層

- ▲ 寒カンベ
- 寒いダンベ
- ☾ 寒いンダンベ
- ☾ 寒いベ
- ☾ 寒いッペ
- ☾ 寒いンベ
- ▼ ベイ系以外のみ



分布図14 「行っただろう」 高年層

- 行ったダンベ
- 行ったグッペ
- ◐ 行ったンベ
- ◑ 行ったッペ
- ▼ ベイ系以外のみ



分布図15 「行っただろう」 青年層

- 行ったダンベ
- ◐ 行ったンベ
- ◑ 行ったッペ
- ▼ ベイ系以外のみ

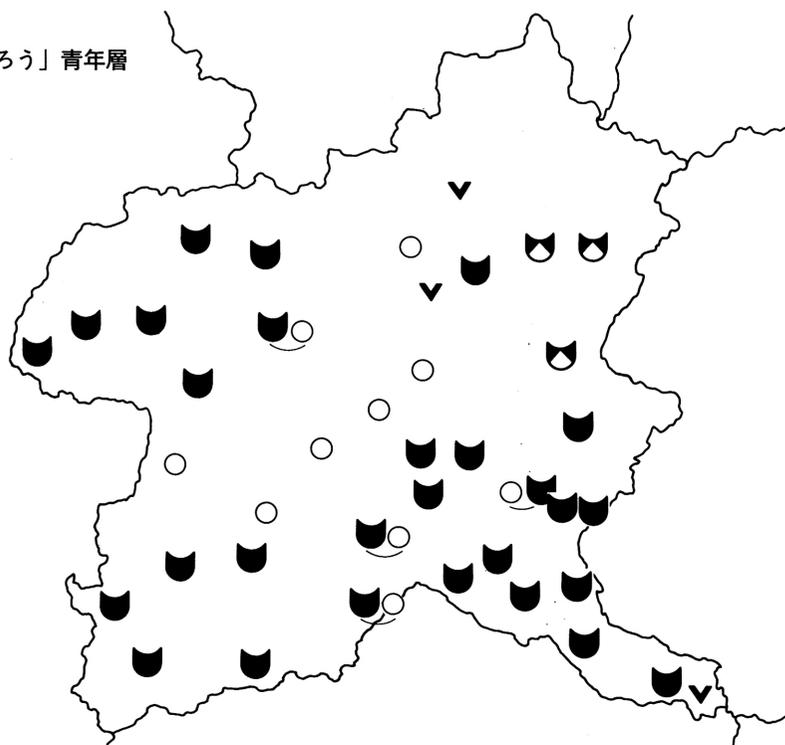


図1 「来ない」高年層

- コない
- ▼ キない
- ▽ 併用

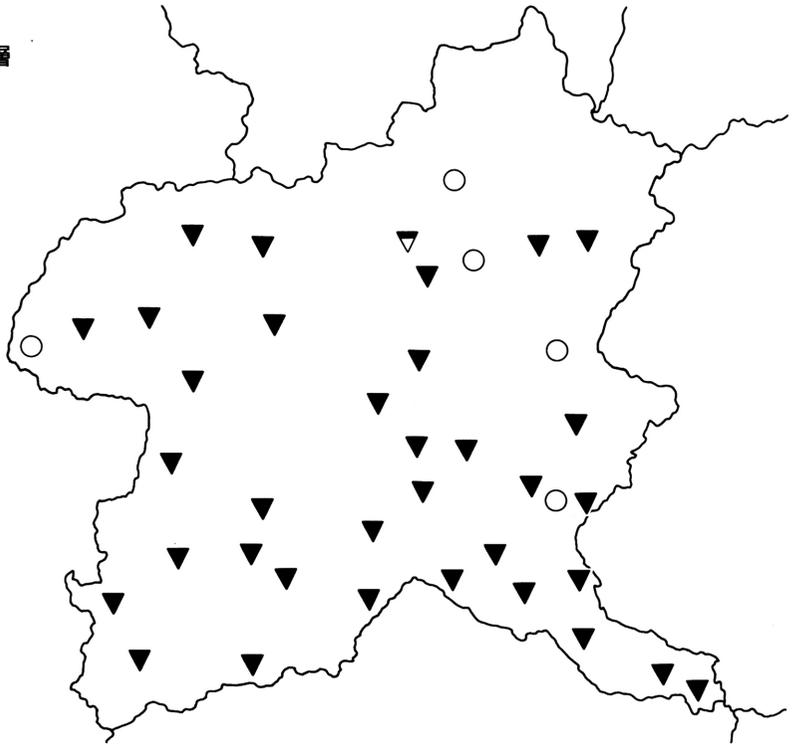


図2 「来ない」青年層

- コない
- ▼ キない
- ▽ 併用

